

木村文助研究

通信16号

2007年11月1日

「村の子供」発刊八〇周年&

木村文助没後五五年記念事業

表題は当研究会の本年度のメインテーマだった。事業推進に当たっては、前年度に予告し新年度の諸会議で協議し準備してきた。お陰様で「講演会」、「展示会」、「文助墓碑墓参」など無事終了することが出来た。

振り返ると、一九八一年に大野町民文化祭で「赤い鳥」に載った綴り方数点を紹介したのが始まりで、まとまった事業に取り組んだのは一九九七年からで「村の子供」発刊七〇周年記念講演会（講師荒木恵吾氏）からである。同年中央公民館で記念資料展、更に森町で文助没後四五年追悼会（荒木氏ら主催）を行っている。

爾来一〇年間の動きは急速に展開された。住民の寄付による「赤い鳥復刻版」購入、大野町郷土資料室に「赤い鳥・木村文助」コーナーの設置、京都仏教大教授岡屋昭雄氏による講演会、文化祭での展示会、新聞・雑誌への投稿、資料収集などを経て今回に至ったのである。



二〇〇七

- 四・五 「木村文助研究」通信No.15発行
- 四・二九 木村文助子孫が資料館「赤い鳥・木村文助」コーナーへ
- 五・一五 木村好氏より文助編著原本三冊寄贈
- 五・一六 森町図書館へ事業趣旨説明、木村館長と吉田司書と面談・木下会長
- 五・二二 大野尋常高等小・元校長、木村文助さん記念事業・函館新聞
- 五・二四 記念事業推進ニュースNo.1発行（No.2 7/6、No.3 7/15 No.4 8/2）
- 六・三〇 木村文助さん編著原三冊大野文保研に寄贈・函館新聞
- 七・三 北斗市教育広報「きらめき」No.5発行へ赤い鳥に載った郷土の作文〈教育課 八木橋直弘氏
- 七・九 各学校まわり事業説明・木下会長
- 七・二五 「村の子供」コピー本作成・関係者・機関配布
- 七・二五 展示会へ八・一五まで・公民館
- 七・二五 木村文助氏の業績紹介・北海道新聞
- 七・二八 講演会・平中忠信氏・公民館
- 七・三一 木村文助氏の足跡たどる・北海道新聞
- 八・五 木村文助さんの足跡展示・函館新聞
- 九・二三 北斗市教育広報「きらめき」No.6発行へ赤い鳥に載った郷土の作文〈教育課 八木橋直弘氏

展示会

「木村文助の足跡と綴り方」をテーマに七月二五日から八月一五日まで公民館で開き参観名簿には七〇人が記載され、実際は二百人以上参観したと推測される。学校、社会教育、北斗市議さんらの名もみえた。

展示物は文助先生の論文、学校経営・写真、「赤い鳥」入選者や綴り方の紹介などコーナー常設展示物に加え、木村好氏寄贈の文助編著の本三冊も含め五〇数点だった。

初日に新聞を見て参観した元上磯町議さんは、「よく一人の業績にスポットを当ててくれましたね」と激励の言葉をいただいた。二日目には元大野小教員の方から電話を受け、公民館で会議があり、終わってゆっくり見たとのこと。綴り方を書いた赤井さんに触れつつ、「木村先生のこと、少しは知っていました。このような業績をあげていたとは」と感激の声だった。現職の先生は、「学校でもミニ展示会を開き、児童へ作文を好きにさせるきっかけにしたい」と話していた。



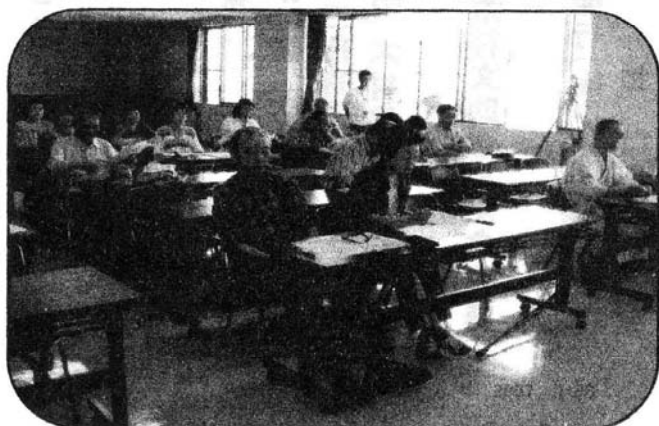
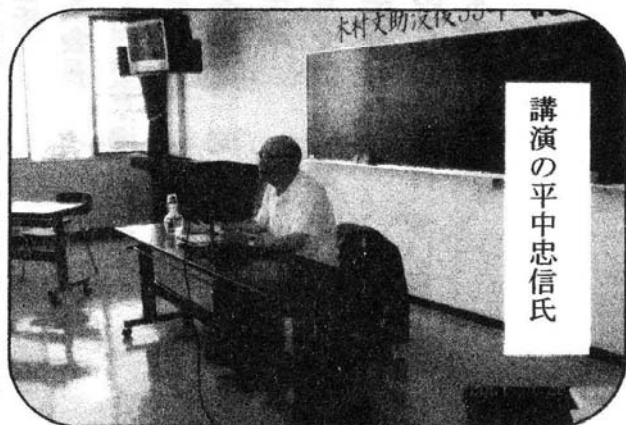
講演会

七月二八日の朝は大雨で心配されたが、午後二時より公民館で札幌市在住の平中忠信さん（文助教え子・福祉事業に尽力）が「木村文助先生の綴り方指導」と題し講演していただいた。

「戦前札幌の中学校で綴り方を習い、色々な事を教えられた。後々物書きのきっかけにもなった。秋田で名の通った先生で、函館師範学校長から招かれ大野校で実践が実り花を開いた。つづり方をグループで吟味し合う、読み聞かせなど独特の指導法を確立した。また砂原校でも磨きをかけた。」

と一時間以上語っていただいた。当日は各地でイベントが重なるにもかかわらず三〇人が参加し、会員、現職・元教員、上磯地方史研会員も熱心に聴講した。

交流会に移り平中さんを囲み親しく懇談した。なお平中先生からは研究発表資料や札幌時代の写真などいただいた。



森町図書館視察・木村家墓参・居宅跡散策

翌二九日朝、大野へ泊まった平中さんを伴って役員・会員一〇人で文助先生が晩年住んだ森町へ向かった。

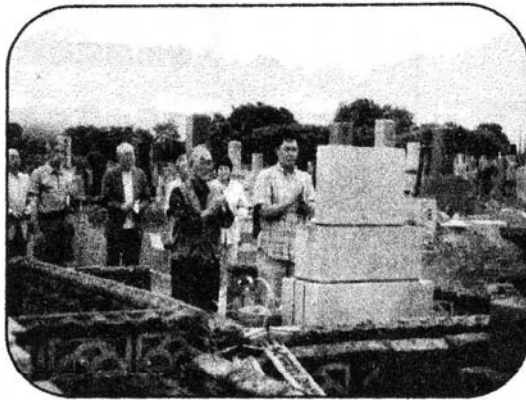
文助氏及び長男不二男氏の資料が整えられている図書館で木村好さん親子と落ちあい、吉田司書さんから解説を受けた。

資料保存は困難だったが何とかコピーにこぎつけたとのこと、「木村文助・不二男親子展」も開いた。

続いて木村家の墓のある共同墓地へ向かい、周辺を清掃し全員でお参りをした。ぶんぼけんは二回目である。

次に吉田さんの先導で文助居宅跡へ歩いて向かい、吉田さんが事前調査してある二箇所立ち止まり、何せ数十年経過し大火もあったことから、時間が掛かったが木村さんも記憶を蘇らせ、居所をほぼ特定した。

昼食を取り懇談し木村さん親子と別れた。三事業を終え、参加・参観者、平中さん、木村さん、吉田さん、



木村好氏(中央)

玉串提供の小野さん、メッセージを寄せた京都岡屋先生、教育委員会、それぞれにお礼申し上げる。

平中さんは上磯地方史研会長落合の案内で上磯地区の三木露風関連のトラピスト修道院敷地内歌碑、葛登志稻荷社歌碑を調査した。

またこの通信を関係機関に届けるなど配慮いただきお世話になっている。

「赤い鳥・木村文助」コーナー一新

・本棚：「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書

コピー、図書、文献、論文、「生活綴

り方」復刻版全巻、関連図書多数、

新聞資料など

・展示：「赤い鳥」入選者一覧表、同表

紙絵、一部の綴り方、学校写真

など

記念事業関係、文助写真など

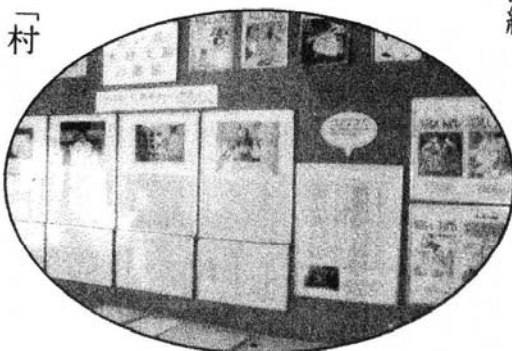
記念事業を終え展示野模様替えをした。

一月三日、四日は市民文化祭でコーナーに

訪れるのを期待している。

木村好氏寄贈本；「綴方生活 村の子供」、「村

の綴り方」、「悩みの修身」 貴重な本有難う御座いました。



連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

このコーナーは、大正から昭和の初めにかけて、童話作家・鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小学校児童の作品を連載しています。赤い鳥には当時、大野小の木村文助校長が子供たちの綴方（作文）や絵などを投稿し、次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

支那人（推奨）

大野小尋三 田山みつ



「支那人」が掲載された大正14年1月号

二、三日前のお昼頃、私とねねときくちやんと、せぼちゃん家の敷板（床板）へ腰をかけていると、口ばし（口元）のびよんと出た支那人が傘をよって、がまぐちの入ったかごをさげて「支那言葉、ちやうせん（朝鮮）わかる、ちやうせん言葉、支那わかる、ちやうせん言葉、日本わからん」と言いながら、のろのろと入って来ました。そして私たちが見ていると「おくさん、がまぐち、買お。かさ、買お」と言いました。せぼちゃん家のが（お母さん）が「な

この連載は、平成十四年十月から十八年一月まで「教育おのおの」掲載の続編です。これまでの掲載分は市立図書館本館・分館、郷土資料館でご覧いただけます。

銭やると、支那人はそれをとって、出て行きました。「おかしな人だね」と言つて、私たちがわらうと、支那人は「そのむすめ買お」と言つて、もどつて来ました。そしてねねのせ中へ手を上げて「このむすめ買お」と言つたら、きくちやんとねねとせぼちゃん家の奥へにげて行きました。その支那人は笑いながら「むすめ買お」と言つて出て行きました。

（大正十四年一月号）

■ことばの意味

【大野小尋三】大野尋常高等小学校尋常科三年で、今の小学校三年生。

【支那】外国人の中国に対する古い呼び名。日本では江戸中期以後、第二次大戦末まで称し、中国大陸そのものの地理的な呼び名でもあった。

【がまぐち】口金のついた小銭入れ。開いた口がガマの口に似ているのでいう。

※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。方言などわかりにくい表現は、かっこ書きで補足しました。

綴方選評

鈴木 三重吉

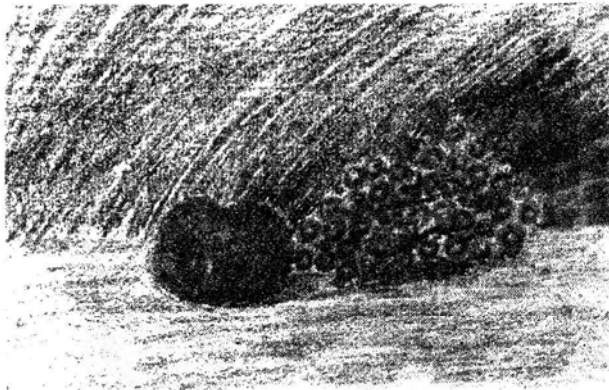
今度は傑れた作が、わりに少なく、やつと六編だけ選に入りました。最初の三年生の田山さんの「支那人」は、ありのままをららくらくと軽快に写生した、ユーモアに富んだ面白い作で、三年生としては、本當にうまいものです。支那人がぼそぼそ言い言い這入つて来るその発程（始まり）から、すぐに人物と事実とがびちやびちやと躍動して来る点が愉快です。「支那言葉、朝鮮わかる……支那言葉、日本わからぬ」と、ひとりごとを言つてやつて来る、その言いぐさからはじまって、支那人の一語一語がいかに生きうつしに出ており、相手の人々の気分なども、いちいち、言外に動いています。しまいに「その娘買おう」「この娘買おう」と、小さい子たちをからかいながら出て行くあたりなどは全く痛快なほど、自然のたくみなユーモアを作っています。すべての表出一寸も無駄がないところを、よく注意して見てほしい

自由画選評

山本 鼎

蛭澤千差君の「りんごと葡萄」は調子のおちついたよい絵です。りんごの色もよく、丸みの具合もよい。ただ、バックはいけませんね。色はいいのだが、斜めにならべた線がいけません。他はやわらかみがあつてよいのに、バックのところだけ、その線のために堅く、平べったくなりしました。

（教育課 八木橋直弘）



りんごと葡萄 大野小尋三 蛭澤千差 (大正14年3月号)

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

このコーナーは、大正から昭和の初めにかけて、童話作家・鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小学校児童の作品を連載しています。赤い鳥には当時、大野小の木村文助校長が子供たちの綴方(作文)や絵などを投稿し、次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

帰った兄の話(推奨)

大野小高二若松きよ

この間、兄は函館の停車場(駅)へ、連結員に入ったのでした(貨車の連結員として勤めた)。母は「ああ今日は夢見悪い、兄は怪我しねあべが(けがをしないだろうか)」と言った

り、鴉が鳴いてくると、「おや鴉鳴き悪いなあ、兄どうしていたべ(どうしているだろう)」とまた言ったりしていました。

私は「夢だっけあ、本当にならねあし(夢は本当にならない)、鴉、毎日鳴いて歩くのは商売だべさ」と言うと、母は「半可臭い童だなあ(ばかな子供だなあ)」



「帰った兄の話」が載った大正14年7月号

この連載は、平成十四年十月から十八年一月まで「教育おおの」掲載の続編です。これまでの掲載分は市立図書館本館・分館、郷土資料館でご覧いただけます。

あ。したら、人死んだ時鳴く鴉、どういんだ鳴き方するば(どういう鳴き方する?)と怒鳴った。私は負けたくないの、余り人騒いで餅持ったり、花持ったりして歩くしけあ(歩くから)、面白がつて餅食いたくて鳴くべさ」と言った。その晩、兄は八時の汽車で家へ来た。母は喜んで「まあよく来た。おら余り夢見悪いしてあ(悪いから)、風邪引いて寝ていたがと思つて心配していだね(心配していたんだ)」と言いがら、お客さんでも来たように、座布団を出して来た。兄は「心配するしてあ(するから)、夢見るんだね」と平気でいた。父は「どうだ、郵便配達していた時よりもこわいか(疲れるか)」と言つと、兄は「なあに、楽で楽で、半日出て半日休みだもんだね(休みなんだよ)」と言つ

ていた。父は「ああいう商売(仕事)する者は、何でも油断しないでやらねばわがねんだ(油断しないでやらなければいけないんだ)」と言つていた。私は編み物をしながら、母のいそいそと歩くのを見て、おかしく思つていた。母も「何でも危ねがつたら、向こうさでも入るにいいしてあ(違つとるにでも入れるから)」と笑つていた。暫くして兄は「この間、おなご(女の子)身投げ(自殺)したの新聞さ出ねがつたが」と聞くと、母は「出てあつた(出ていた)」と言つと、兄は「丁度、おらたち乗つて来た列車で三間ばかり向こうの方に黙つて立つて、海の方さ向いて手合わせていて、二間はかりになつたげあ(なつたら)、汽車の方さ向いて、何だか喋つてあつたきやばあ(なにか喋つていたと思つたら)、ばつたり座つてしまったもんだね。なんぼ(いくら)叫んでも、汽笛鳴らしたつて動がねあもんだも(動かないのだもの)、(汽車に轢かれても)まだびくびく動いてあつたであ

(動いていたよ)」と言つた。

母は「十五や十六(歳)で、どういんだことあつたか知らねあども(どんなことがあつたかは知らないが)、おなごわらし(女の子)で身投げするなんて碌たもんでねあ(ろくなものじやないよ)」と私の顔を見た。兄は「やあ、おなごわらしで、あのくらい度胸いいもの、恐らぐねあなあ(きつとほかにはいないな)。(汽車が)通つてしまつて、胸まで着物まくれたの掛け直してから、ごつたりなつたもんだものな(轢かれたあと、自分で着物を直してからぐつたりした)」と感心していた。

(大正十四年七月号)



■ことばの意味

【鴉鳴き悪い】カラスが家のそばや屋根の上で鳴くと、不吉なことが起こるとか、人が死ぬといわれる迷信。

【三間ばかり】一間はふつう六尺(約一・八メートル)で、その三倍ほどの距離。

※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。方言などわかりにくい表現は、かっこ書きで補足しました。

綴方選評

鈴木三重吉

若松きよさんの「帰った兄の話」は、対話の方言が読みにくいですが、これも叙写の点では、簡潔に引き締めた書き方でもって、人と場面と、空気と気分とを、はつきりと色彩強く描き上げています。鳥の鳴き声について、お母さんと言ひ合いをする場面の、きよさんの言いくさには笑わせられます。お父さんやお母さんが、兄さんの職業の危険を気づかつて、いろいろ注意される気持ちなどもよく浸み出ています。終いの方の、少女が轢死した話のところなども、簡潔な対話的描写でもって、事実が焼印でも押すようにじりじりと印象的に出ています。お母さんが「女の子で身投げなんかする奴は、ろくなものじやないよ」と言ひながら、きよさんの顔を見られるところなども皮肉です。

あの女の子が、汽車に轢かれた瞬間に、着物を直して倒れた度胸には全くびくつきりさせられません。度胸というよりも、むしろ羞恥の反射作用でしょうけれど。

(教育課 八木橋 直弘)

資料閲覧(赤い鳥・木村文助コーナー)

「北斗市郷土資料館」

旧大野町市街地に入り大野小学校の校門を入って右側、木造の建物です。

〇四一一二〇一

北海道北斗市本町二〇〇

TEL (〇二三八) 七七・六六八

開館；九・〇〇〇〜一二・〇〇

一三・〇〇〇〜一六・〇〇

(郷土資料館係が対応します)



・休館日もありますので遠方の方は事前に連絡ください。

・函館方面↓車で、国道二二七号に入り旧大野町市街地まで、約30分。

・道北方面↓車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、一〇分ほどして

大野方向に入って右折し、更に市街地を進み五分で着きます。



編集・作成；会報委員会

木下寿実夫、国塚妙子、古俣芳衛、

小松真之、島津晶二

発行；大野文化財保護研究会

(略称；文保研・ぶんぽけん)

〇四一一二〇一

北海道北斗市本町六八

会長 木下 寿実夫

(〇二三八) 七七・八五三五